

# こんなものを読んできた(10)

～田中芳樹「銀河英雄伝説」創元 SF 文庫～

校長・鈴木 健

遠い未来、人類は宇宙に広がり、その勢力圏は、銀河帝国、自由惑星同盟、フェザーン自治領の3つに分かれていました。そして銀河帝国と自由惑星同盟は果てしない戦争を続け、フェザーン自治領は両者の間で利益を貪るという構図が定着していました。ところが銀河帝国に圧倒的なカリスマと軍事的・政治的才能を持つ野心家ラインハルト（イラスト右）が現れたことで、停滞していた歴史は急速に動き出します。同じころ自由惑星同盟にも、類まれな戦略・戦術の才能を持つ青年軍人ヤン・ウェンリー（イラスト左）が現れ、ラインハルトと対決します。

生徒向けにはここにアニメのイラストが入ります。

「銀河英雄伝説」は40年も前、私が大学生だったころの作品です。しかし、今も日本だけでなく海外にも多くのファンがいて、現在も2回目のアニメ化が進行中です。この息の長い人気の秘密はどこにあるのでしょうか。私は、この作品に込められた作者の歴史観にあると思います。

この物語の開始時点、銀河帝国では皇帝専制政治の下で貴族たちの腐敗が進み、平民の不満がくすぶっていました。そこに現れたラインハルトは、軍事力を背景に独裁権力を握り、貴族から富と特権を取り上げ、人々が身分にかかわらず自分の力を発揮できる平等な社会を作り、国民からの圧倒的な支持を得ます。一方、自由惑星同盟では、根拠のない弁舌で世論を操る政治家トリューニヒトによって民主主義は空洞化していました。トリューニヒトは膨大な戦死者や損害がでているのに、私利私欲のため国民を煽って戦争を続け、ヤンたちの活躍も空しく自由惑星同盟は衰退していきます。

「高潔な独裁者による理想的な専制政治」と「口先だけの政治家に踊らされる腐敗した民主政治」はどちらが良いか。この問題に対し、ヤンは「どんなに腐った政治でも、それを批判する自由があるだけ、民主主義の方が良い」と語り、民主主義の下の軍人としての姿勢を守り続けます。大学生のころの私は、この政治論的な部分が「お説教」のようで好きではありませんでした。ですが今読むと「すごくいいことを言っている」と思います。

今の日本は、物語の中の自由惑星同盟と同じくらいひどい状況だと思います。選挙のたびにデマや中傷が流れ、世論が右往左往しています。せっかく憲法で言論の自由が保障されているのに、「不謹慎狩り」のように、自発的に言論の抑圧にはげむ人がいたり、逆に言論の自由を振りかざして平然と人を傷つける人がいたり…。長い歴史をかけて築かれてきた民主主義の価値観が危機に瀕しています。

しかしこんな難しい話は抜きにしても、「銀河英雄伝説」はとても面白いお話です。大長編ですが2巻の終わりまで読めば、どっぷりはまってしまおうと思います。本編10巻、外伝5巻がすべて戸田翔陽高校図書館に入っていますから、ぜひ読んでください。